

フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難

—日本の学校で学ぶ子どもたちに焦点を当てて—¹

宮城学院女子大学非常勤講師 矢元貴美

1. 目的と背景

本稿では、フィリピンにルーツを持つ子どもたちが日本の学校教育で直面した困難を明らかにし、彼らが考える日本の学校で学ぶ困難と、困難の要因および困難への対処の特徴を考察する。基になるデータは、子どもたちへのインタビューから得られたものである。

日本では日本国籍と外国籍の親の間に生まれる子どもや、外国籍の両親の間に生まれる子どもも多く暮らしている。1996年から2015年の20年間に日本国内で日本国籍の親と外国籍の親の間に生まれた子どもは約43万人、外国籍の両親の間に生まれた子どもは約20万人であった。日本国籍の親とフィリピン国籍の親の間に生まれた子どもは同期間に約8万人、外国籍の両親の両方か一方の親がフィリピン国籍である人は同期間に約9千人であった²。1年間の出生数は20年間で約半分に減り、特に父親が日本国籍で母親がフィリピン国籍の子どもは約3分の1に減少したが、逆に両親ともフィリピン国籍の子どもは約5.6倍と増加したことが分かる(図1)(厚生労働省 2016)。

日本で暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもの多くは、1980年代半ばから増えた、興行労働者や外国人花嫁として入国し定住した女性と日本人男性との間に生まれたり、その女性たちが日本人男性と再婚後にフィリピンから呼び寄せたりした人である。他に日系2世・3世として来日した人や外国企業の日本支社等で働く人たちの子どももいる。

日本の学校でも外国にルーツを持つ子どもが多く学んでいる。文部科学省の調査によると、2016年度、初等中等教育で学ぶ外国人児童生徒は約8万7千人、帰国児童生徒³は約1万3千人であった(文部科学省 2016)。2016年度の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査⁴」では、

¹ 本稿は2017年10月27日に開催された宮城学院女子大学キリスト教文化研究所公開研究会にて筆者がゲスト発表者として発表した「フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難—日本の学校で学ぶ子どもたちに焦点を当てて—」の発表原稿を加筆・修正したものである。当該発表は矢元貴美(2017)「日本の初等中等教育を受けたフィリピンにルーツを持つ子どもたちの『困難さ』」(平成28年度博士学位論文、大阪大学人間科学研究科へ提出)の一部、矢元貴美(2014)「日本の学校生活におけるフィリピン人の親を持つ子どもたちの困難と喜び—日比両国の学校生活を経験した子どもたちの視点から」大阪大学人間科学研究科グローバル人間学専攻『グローバル人間学紀要』6: 5-26、第18回フィリピン研究会全国フォーラム(2013年7月6日、於神戸女学院大学)における口頭発表に基づいたものである。

² 1992年に調査項目にフィリピンが加えられた。両方または一方の親が外国籍である子どもの出生数で調査対象とされるのは、日本で生まれ届が出された人である。

³ 帰国児童生徒とは、海外勤務者等と共に引続き1年を超える期間海外に在留し、調査年度の前年度の間に帰国した者をいう。

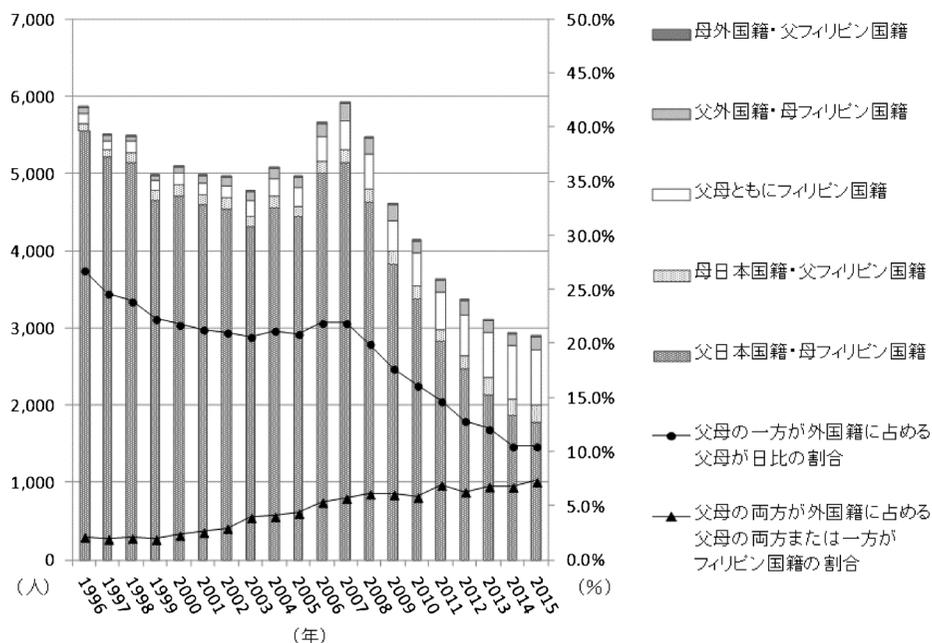


図1 父母の両方または一方がフィリピン国籍である子どもの出生数
 〈出典：厚生労働省「人口動態調査」1996年～2015年を基に筆者作成〉

日本語指導が必要な児童生徒のうち外国人児童生徒は約3万4千人で、日本国籍の児童生徒は約9千6百人であった。外国籍の児童生徒は1997年度の約2倍、日本国籍の児童生徒は約7倍となった。外国人児童生徒のうち母語がフィリピン語⁵である人は全体の約18%を占め、1997年度の約10倍になり（図2）、母語別では第3位であった。日本国籍の児童生徒のうちフィリピン語を使用する人は全体の約32%を占め、言語別では第1位であった（文部科学省 2017）。図1で示した出生数と併せて考えると、国内での出生数は減った一方、日本国籍の有無にかかわらず、フィリピンで生まれ、日本へ移動した人が増えていると考えられる。

1980年代までは、外国にルーツを持つ子どもの教育問題として、在日韓国朝鮮の子ども（佐久間 2005；小内 2009；宮島 2012）や海外帰国子女（佐藤 2001）に関する問題が議論されてきた。1970年代にニューカマーが増加し始めると、日本語や日本の学校文化に馴染みのない子どもの教育課題に対応する施策も実施されてきた。しかし彼らの母語や出身国で獲得した能力や経験を考慮しない、学校への同化・適応施策が中心であった（佐藤 2010；太田 2000）ため、教育課題は解決され

⁴ 1990年6月の出入国管理及び難民認定法の改正が施行された後、仕事等で来日する外国人に同伴される子どもが増加したことから、1991年度より開始された調査である。1999年度までは隔年、1999年度から2008年度までは毎年度、2008年度以降は隔年で実施されている。明確な判断基準はないため、日本語指導が必要と判断されるかどうかは、判断する教員や学校によって異なる可能性もある。調査対象は公立学校のみである。

⁵ 本稿では、インタビュー協力者の語りで使用されている場合を除き、フィリピン語、フィリビノ語、タガログ語はすべて「フィリピン語」と表記する。

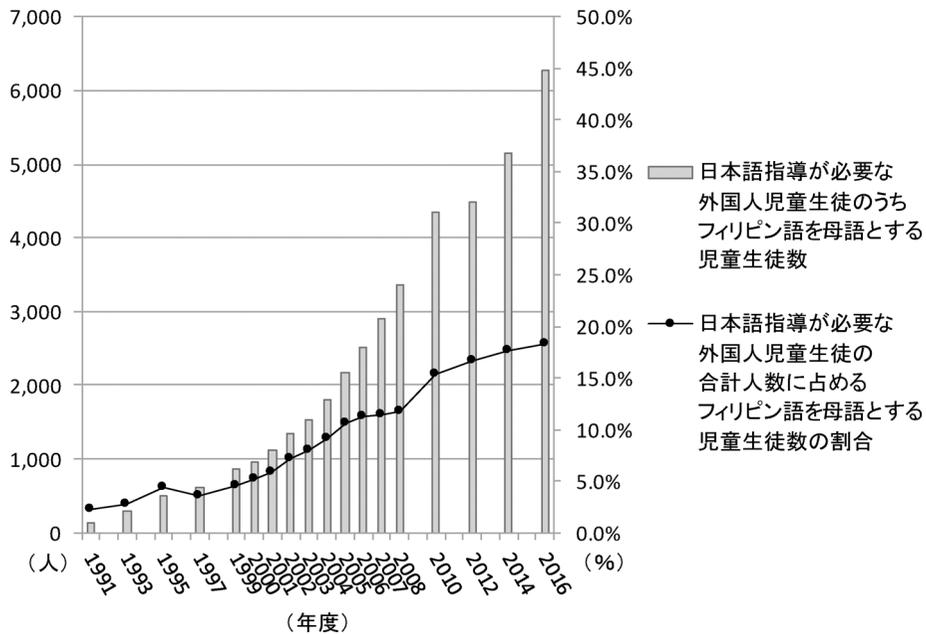


図2 日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち母語がフィリピン語である児童生徒数および日本語指導が必要な外国人児童生徒数に占める割合の推移
 〈出典：文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」1991年度～2016年度を基に筆者作成〉

ないままであった。

日本で初等中等教育を受けている外国にルーツを持つ子どもたちが日本の学校で直面する困難については、主に教育社会学や言語教育の分野（恒吉 1996；太田 2000；志水・清水 2001；児島 2006；山ノ内 1999；森田 2007；清水 2006；湯川 2006）で研究されてきた。日本人の子どもたちに同化したり、学校教育に適応したりすることの困難を中心に議論され、困難が個人の能力や資質に還元されることや、学校の同化主義への批判がされてきた。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難については、学校で抱える困難（梅澤・土屋 2003；高畑 2011；Jabar 2011；高畑・原 2014）のほか、教育に対する家族の意識や家族関係が子どもの教育に与える影響に関する研究（徳永 2008；角替・家上・清水 2011；角替 2013；額賀 2012, 2014, 2016；三浦 2013）や、親の教育への関与と困難に関する研究（Jabar 2010）も行われている。背景や要因にフィリピンの価値観があることが指摘されてきた一方、彼らが困難にいかに対処しているのかは検討されてこなかった。

日系ブラジル人や中国帰国者の子どもの困難の研究は蓄積されてきたが、フィリピンにルーツを持つ子どもの困難を包括的に取り扱った研究はまだない。本稿では、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの研究に、フィリピンにルーツを持つ子どもの視点を加え、日系ブラジル人や中国帰国者の子どもの困難との相違点も見いだしたい。

本稿では、子どもの両親または一方の親がフィリピン国籍を有するか、フィリピン出身である場合

に、「フィリピンにルーツを持つ子ども」と呼ぶこととする。ここでは中学生以上の年齢に相当し、フィリピンにルーツを持ち日比両国または日本のみでの学校生活を経験した人を調査対象とする。

2. 調査方法と調査協力者

調査方法には半構造化インタビューを用い、得られたデータは定性的コーディングにより分析した。

インタビュー協力者は12歳～30歳の男性13名と女性16名で、筆者の以前からの知り合いや、知り合いから紹介していただいた方である。調査期間は2012年12月から2016年5月である。インタビューには日本語、フィリピン語、英語のうち協力者が最も使いやすい言語を主に用い、それ以外の言語も交えながら行った。

協力者の居住地は九州、近畿、東海、中部、関東である。出生地は10名が日本で、残りの19名はフィリピン生まれである。日比間の移動回数は2回以上13名、1回のみ11名、0回5名で、日比間を移動した年齢は様々であった。日比間の「移動」に言及する場合、移動先の国でおおむね3か月以上生活する場合を指すこととする。

成人前の移動の理由では、フィリピンから日本への移動については、先に日本で暮らしていた母親や家族と一緒に暮らすためという理由が最も多かった。日本からフィリピンへの移動では、家庭の事情という理由が最も多く、学業のためという理由もあった。日本とフィリピンの間を移動した経験がない5名を除く日比間を移動した人の全員が初等中等教育の途中でフィリピンの学校から日本の学校へ、またはその逆の移動を経験していた。

日本へ移動した時の日本語の運用能力については、1名を除き、全く日本語を知らなかったか、知っていたのは挨拶や自己紹介のみであった。大半の協力者はインタビュー時に、日常会話や日本の学校で学習するために必要な最低限の日本語の運用能力は獲得していた。フィリピンから日本へ移動した人たちは1名を除き、日本の学校で日本語指導、母語支援者による支援、少人数授業といった支援を受けていた。

3. 子どもたちが日本の学校で学ぶ困難

協力者たちが直面した困難には、日本語習得におけるもの、人間関係構築に関わるもの、学習上のもの、学校文化に関すること、家庭環境に関するもの、複数言語を使用すること、ルーツに関するものがある。彼らの語りを紹介しながら項目ごとに見ていく。

3-1. 日本語習得に関する困難

日本語をほとんど知らずに日本の学校に入った場合、日本語が理解できない間は教員や同級生らとのコミュニケーションや教科学習で苦勞する。ある程度のコミュニケーションが取れるようになってからも、教科学習での苦勞を経験していた。同級生らとの関わり合いの中で日本語を習得したり、中学校で友だちができなかった悔しさを原動力にして高校では日本語を習得し、友だちを作った人もいる。

「言葉を覚えるのとか大変で、泣いてしまったんですよ。限界やから。イヤになってきて。フ

ィリピン帰りたいぐらい。だって言葉覚えるの大変やもん。[中略] 友だちとかもそんなにすぐにはできてないから、言葉が分からない、私はどうやってみんなと遊ぶの？みたいな。一人で部屋で泣いてた。」

「本当に最初の頃は言われていることやクラスで先生が前で説明していることが理解できませんでした。行くだけ行って何も理解できない。絵を描いているだけの時もあるって、言葉が自分の外にあることもありました。[中略] 私は1人で。だから、今日は話さないでいようと思うような時もありました。おはよう、だけ言って、あとは何も言いませんでした。そういう日が続く時もありました。」

「中学の時はしゃべられなかったから、あんまり友だちいなかった。悔しかったから高校になってから絶対ペラペラなって、いっぱい友だち作ろうと思って。願いがやっと叶ってめっちゃうれしい。」

3-2. 学校における友人や教員との人間関係における困難

フィリピンから日本へ移動した人の多くは、日本の学校に通い始めた時から、同級生がよそよそしいと感じたり、通い始めた当初は温かく迎えられたものの、時間が経つにつれて距離を置かれるようになったと感じたりしていた。フィリピンと日本での人とのつきあい方の違いや友人関係の構築の仕方が異なることから、友人づきあいに戸惑ったり困難を感じたりした経験を語る人もいた。

「友だちづきあいが全然違うのはびっくりした。フィリピンは友だちっていったらもう、バルカーダ (barkada = 常にその集団で行動を共有するような関係) じゃないですか。バルカーダは何があってもバルカーダ。日本で一番理解できひんのはそれかな。」

「文化で困ったことは、馴れ馴れしいっていう感覚が、私フィリピンではなかったの。友だちから説明してもらった時に、そういう考え方あるんだって思って。」

いじめや偏見を経験したことも言及された。実際にいじめの対象になってつらい経験をした人もおり、外国人生徒が多数通う高校でも嫌がらせを受けた人もいた。嫌がらせを受けたりいじめられたりした時に、対抗して解決した人もおり、加害者に面と向かって対峙できない場合でも、教員に助けを求めていた人もいる。

「日本語全くしゃべれなかったから、いじめに遭ったんですよ。足で蹴られたりした。[中略] 体小さかったから、全く力とかなかった。」

「『デブ』とか『国に帰れ』とか言われた。[自分は日本国籍だから]『日本におけるじゃん』と言ったら、『そやな』と言って友だちになってん。[中略] 言い返さなかったらたぶんずっといじめられてたかも。日本人をいじめると言い返さないからつまんないねんて。『じゃあすんな!』って言うた。」

同級生や友人との人間関係だけでなく、教員が厳しく、いじめられているように感じて恐ろしかったとか、教員の誤りを指摘すると嫌な顔をされたというように、教員との人間関係に苦勞した人もいる。

「英語の先生に嫌な顔されて。やっちゃいけないのかなってちょっとその時思って、それ

から間違いがあっても、もう言わなかったんですけど、なんかその先生に嫌われてる気がしました。」

3-3. 教科学習と義務教育修了後の進路に関する困難

フィリピンから日本へ移動した協力者らは、日本語指導を受けていたか否かにかかわらず、日本語の運用能力が充分でないことにより、教科の学習にも困難をきたしていた。

「テストは低かったです。理解できませんでしたから。分からないと絵を描いているだけでした。[中略] フィリピンでなら勉強できたことを学ぶことができなかった。もったいないです。[中略] 数学になるとお腹が痛くなるようでした。たぶんストレスを感じていたのです。」

「大変だったのは勉強。それも [フィリピンへ] 帰りたかった理由です。[中略] 高校に合格できても、どんなコースを選択できるだろうと考えました。能力はまだないし、漢字を書くこともできないし、まだまだ足りないし、だからフィリピンへ帰りました。」

彼らはもちろん、困難な状況であっても、教員や友人らの助けを借りたり、自身で懸命に努力したりして、教科学習の内容を習得しようとしてきた。

「[教科の宿題は] 分からなくても、全部赤で書いてやってたんですけど、その書いてる内容は分からなくて。いつも徹夜してて。」

「[先生たちが] 特別に補習してくれるし。めんどくさいけど、正直。やけど、うちのためになってるから、うちも頑張るしかない。わざわざ教えてくれてるし。」

フィリピンから日本へ移動した協力者らの教科学習における困難では、日本語の運用能力が原因で経験したものと別には、フィリピンで経験しなかった体育の実技に言及した協力者が複数いた。

「プールあるじゃん、夏休み終わってからも。うち、嫌だったから、先生に『水着買うのもったいないんじゃないですか、あと何回かだけやし』と言ってずっと見学してた。[中略] 恥ずかしいやん。フィリピンないから、そんなの。」

日本とフィリピンの間を学齢期途中で移動した協力者の中には、中学校卒業後の進路に関する困難に直面した人が多い。高校へ進学することができた人たちも、日本語の運用能力や成績によっては、必ずしも希望した高校への進学が叶ったわけではない。

「[高校には] 行かなかった。高校ちょっと難しかったもんで、ああ、もう無理やなって。[テストが] 全くできなかったもんで、そこで辞めてしまいました。」

「[通っている高校を受験したのは] 自分にある選択肢はここだけだったからです。入学試験の時、普通の高校に合格できる自信がありませんでした。」

「中学の時は成績があまり良くなかったんで、選べる高校が少なかったです。[中略] 最初、工業高校で入りたかった。担任の先生に、今の成績じゃ無理だし、外国人枠のある学校の方が確実に入れるんちゃうかって。」

3-4. 学校文化に関する困難

フィリピンから日本へ移動し、日本の学校で学んだ協力者たちは、学校文化の相違による戸惑いや

疑問を感じている。規律や規則が厳しく、フィリピンでは当然と考えてしていた行動が日本では咎められたり、フィリピンではすることを求められない行動をするように求められたりしたことが挙げられた。給食に困ったとか、部活動での上下関係や練習の厳しさを挙げた人もいた。

「学校におやつを持って行かれへんのが、一番嫌やったな。1回チョコ持って行って、食べて、なんかみんな集まってきたから、こうやって渡して、先生に怒られてたの、結構ある。最初の頃。2週間目か3週間目ぐらい、知らなかった。」

「学年でいろいろトラブルとか、いつも集まりがあったから、全体で学年集合が嫌いやった。みんな静かにしないと。ちょっとその学校、厳しい学校やったから、なんか嫌やねん。もっと明るい学校ないの？みたいな感じ。」

「[姉とは] フィリピンの違いとか話したりしてました。不思議に思ったこととか。制服のこととか。グループ行動してる、男女がすごい分かれてる。[スカート丈が] 短すぎるよねって。[中略] 私勝手に2年生のところ [= 姉の教室] 入ったら、お姉ちゃんのところになんで勝手に入るのって感じがして、私も入ったら周りに見られてびっくりしたんですけど。フィリピンだったらそれが普通なのに。」

3-5. 家庭環境に関する困難

親が日本で働くために子どもを残してフィリピンを離れたり、子どもをフィリピンの親戚に預けて養育してもらったりしていた場合、長くフィリピンで親と離れて暮らしていた人たちは、頻繁に会うことができないことを寂しく感じていた一方、離れて暮らさざるを得ない事情を理解していたと語った。離ればなれの家族は「完全」な家族ではないと感じている人もいる。

「ずっとフィリピンでいたくて。お父さんがだまして連れてきたって今は笑いながら言ってるんですけど。めっちゃ嫌やったんですよ、おばあちゃんと離れるの。おじいちゃんおばあちゃん大好きだったんで。」

「[母親と一緒に暮らしていなかった時は] ちょっと寂しいですね、最初。[中略] お父さんとお母さんと日本で働いた方が、お金になる、自分の将来のためになるって、説得されてます。それはよく充分理解してます。」

「家族のことで一番の夢はもちろん一緒に暮らせるようになることです。母が外国にいるので、ほとんどの時間、離れていましたから。[中略] 私にとって、ぐちゃぐちゃではない家族は、一緒にいる、『ひとつ』である、完全であるということです。」

日本へ移動した人の中には、慣れない日本での学校生活に加え、なじみのない新しい家族との生活に戸惑ったり、経済的な理由で働かざるを得なくなったりし、それが学校生活に影響を与えた人もいる。

「[母親の] 知り合いに預かってもらって、お母さんは仕事に行ってたって感じです。[中略] 知らない人と居候するわ、全く知らない中学校行ってあれこれ教わる。[中略] 家帰ったら怒られるわ、なんやかんや言われるわ、僕は何をしたんすかって話。」

両親や年上のキョウダイらが日本語での理解が難しく、身近に通訳してくれる人がいない場合、年

齢の低い子どもたちが学校からの連絡の説明や公的手続きを担うことになる。大人がすべき手続きをなぜ自分がやっているのだろうとつらく感じていた人もいる。

「つらかったですけどね。なんで僕がやらなきゃいけないんだって。ほかの友だちみんなお父さんとかお母さんがやってくれてるのに、なんで僕がっていうのは昔は強くありましたね。ちょっと惨めだな、俺、みたいなのは。」

3-6. 複数言語を使用することに関する困難

フィリピン語、英語、日本語といった複数の言語を使用することができる人たちは、日常生活や学校生活でそれぞれの言語を使い分けているが、どの言語の習得も中途半端であると感じたり、複数の言語間で思考する際に混乱が生じたりすることもある。10代前半以前にフィリピンから日本へ移動してくる子どもたちでは、日本語の運用能力を獲得するにつれ、次第にフィリピンで使っていたフィリピン語や英語を忘れていくという状況が起こりやすく、親とコミュニケーションを取るのが難しくなったことが大変だったと語った人もいた。日本語を勉強することの大切さとともに、自分自身の言葉であるフィリピン語を忘れず、さらに学んでいくことが大切であると語った人もいる。

「タガログ語も英語も忘れて、日本語の方が優位に立ってきて、親とのコミュニケーションができなかったんですね。[中略]特に中学校になってくると。だからそれは大変でしたね。[中略]お母さんとのコミュニケーションがうまくできなかったっていうのは今でもだいぶ苦しい……。」

「日本語は勉強する必要があります。でももちろん、自分たちの出身がどこであるかということ。もちろん本当に自分の言葉を忘れないように、すべてのタガログ語の言葉を知っているわけではないので、嫌でも勉強する必要があります。」

3-7. フィリピンにルーツを持つことに関する困難

協力者たちのアイデンティティーの捉え方は様々であった。自分がなにじんであるかと考えたことはないと言人もいれば、普段から意識している人もいる。日本人として行動する時とフィリピン人として行動する時の切り替えが難しいと感じている人もいた。

「その場所と環境と、状況によって、自分日本人だなんて思う時と、フィリピン人だなんて思う時があるので、一概にどっちって言えないんですね。」

「時間的には俺、フィリピン人。のんびりしてる。遅刻してもええ、みたいな。[中略]日本人やったら、今は上下関係？バイトやって、後輩に挨拶されんかったら、イライラする。あいつなんなん？みたいな感じになってしまった。」

「自分らしく、別にあなたはフィリピン人やからってフィリピン人みたいな動きとか、性格とか、わざわざ変えなくてもいいんじゃない？って思う。」

日本で一般的に抱かれているフィリピンに対するイメージが良くないことから、フィリピンについて尋ねられるのがイヤだと思っていたり、フィリピン出身であると答えた時に嫌そうな反応をされ、反論したりした経験がある人もいる。

「部活で友だちと話してたんですけど、『国はどこから?』って聞かれて『フィリピン』って言ったら、[中略] すごい嫌そうな顔でゴミのことを話してて。フィリピンのスモークーマウンテンのこと話してるのかなって感じがしてたので。で、お姉ちゃんが英語で、こういうこと話してるんでしょって言って。」

「いじめはなかったですね。でも『フィリピンはどうなん?』って言われるのがむっちゃイヤだった。フィリピンっていいイメージがないじゃないですか。[中略] [母親がフィリピン人だと意識したことは] あんまないです。逆に自慢してたんですよ。」

フィリピンにルーツを持つことを肯定的に捉えることができる人もいれば、そうではない人もおり、また、小・中学生の頃はルーツを否定的に捉えており、10代後半に肯定的に捉えるようになったというように、年齢による変化を語った人もいる。フィリピンに対して肯定的な面と否定的な面の両方を認識しつつ、フィリピンが好きであるという人もいる。

「見た目も名前も日本人なので、黙ってれば日本人でいられるんですよ。でも母親が出てくると、フィリピン人というルーツが出てくるんですね。それがすごい嫌な時期がちょうどその時期で。」

「[外国人みたいに見えたら] イヤ。[中略] 今の高校でも、お母さんがフィリピン人で、自分がハーフっていう人は3人ぐらいいます。[でも自分は] 言わない。[中略] [小・中学校で] 男の子はよくからかわれてました。[それを見ていて] 隠したいなって。」

「[フィリピンは] やっぱり時間にルーズというか。でもまあ、ルーズは全体的にありますね。ここに来ないとか、お母さんといてもすぐはぐれるんで。もう、自由すぎるというか。なんか、適当ですね。ほんとに。でも、そういうところも好きですね。」

3-8. 日本の学校教育で評価できる点とできない点

協力者たちが語った、日本の学校教育で評価できる点とできない点としては、以下のようなものがあった。評価できる点では「フィリピンのことを学べる授業で母国のことも分かり、日本人生徒もフィリピンのことを知ることができてよかった。」「取り出し授業があり、分からない時は何度でも質問できました。」「日本にいるから、日本人とどうやって暮らすか知らないダメじゃないかと思ってる。」「日本の教えの方がちゃんとしてて分かりやすい。いろんな経験ができる。」と語られたように、学校制度や規律、学習面や経済面での配慮や支援、様々な経験ができることが挙げられた。評価できない点は「テストに同じ問題がそのまま出るのは、満点取れるけど、自分で考えないので良くない。」など、いじめの問題や学校の授業形態が挙げられた。

4. 考察

調査協力者たちが日本の学校教育で直面した困難の語りには、困難とともに、困難ではないものについても語られていた。この2つの要素には、学校、勉強、家族、友だち、ルーツなどがあつた。日本語が理解できず学校生活がつかつたと語つた人も、友人と過ごした学校生活を楽しい思い出として挙げたり、フィリピン出身の母親のことは自慢だったが、フィリピンについて尋ねられることは

イヤだったと答えたりした人がいたように、それぞれの要素は同時に両方に結びついており、子どもたちは学校生活で困難と困難ではないものを同時に経験している。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちが直面する困難には、一般的に経験されるものや他のルーツを持つ子どもたちに共通するものとは別に、フィリピンにルーツを持つことが要因となる困難も存在する。

4-1. 複数の選択肢を持つことによる困難への直面と困難の解消

まず、フィリピンにルーツを持つ子どもたちには複数の選択肢があることが挙げられる。彼らは生活の場を日本、フィリピン、アメリカなどの第三国のどこに置くかという国の選択肢のほか、どの言語を活用するかという言語の選択肢も持っている。複数の選択肢を持てている要因の1つは、フィリピンや第三国の親族との良好な関係が維持できていることにより、別の国への移動を選択肢に入れやすいことがある。2つには、高畑・原（2014）で「フィリピンやアメリカ等の英語圏で大学進学、あるいは大学卒業後に英語圏へ移住し就職する等の選択肢があるのが、在日フィリピン人第1.5世代⁶の強みである。[中略] その『可能性』を持っていることが心の余裕となり、日本人よりも選択肢があるという自信となって、彼（女）らの日本での生活を精神的に支えている（高畑・原 2014 : 37）」と指摘されているように、英語の能力を活用できることである。学齢期途中に日本へ移動した人だけでなく、日本生まれ日本育ちや就学前に日本へ移動した調査協力者の中にも、その強みを活かし、フィリピンで進学したり、日本で高校に進学できた人もいた。複数の選択肢を持つことは、迷いや揺れが生じやすいことにも、1つの選択肢が閉ざされても別の選択肢を選べることにもつながる。

4-2. 複数の生活の場における困難への直面

彼らは、常に日本社会とフィリピン社会の両方で生活することにより、家庭内でも学校でも地域社会でも困難に直面しやすいと言える。

たとえば在日日系ブラジル人は家族を呼び寄せたり帯同したりしているため、ブラジルにルーツを持つ子どもたちの多くはブラジル人の両親とともに生活しており、家庭内では、ブラジルの言語や習慣や価値観が優勢であると考えられる。ブラジル人集住地域では、ブラジル料理レストランで食事することや、ブラジルの食品や雑貨を入手することは難しくなく（池上 2001 : 31）、同じルーツを持つ人びとで構成される地域社会の中で日常生活を送っていると言える。また中華学校やブラジル人学校は日本各地に存在し、それぞれのルーツを持つ子どもたちは、それらの学校への通学を選択し、彼らがルーツを持つ国や地域の言語や学校文化や教育方法で学校生活を送ることも可能である。家庭、学校、地域社会の少なくとも1か所においては、ルーツを持つ国の言語や習慣や価値観に基づいて生活する場があると言える。

一方フィリピンにルーツを持つ子どもたちの状況は異なる。両親ともにフィリピン人である子ども

⁶ 「10歳前後で来日し、フィリピンと日本の地域社会および教育環境で育った青少年（高畑・原 2014 : 21）」と定義されている。

や、フィリピン人である一方の親のみと暮らしている子どもたちは、家庭内ではフィリピンの言語や習慣や価値観に触れる機会が多いと考えられる。しかし多くは父親が日本人で母親がフィリピン人である家庭で暮らし、日本の言語や習慣や価値観の方が優勢となることが多い。

名古屋に比較的集住している（高畑 2010）ことを除けば、フィリピン人は分散居住している。フィリピン人コミュニティは小規模であり、普段から日本人住民との相互作用があり（永田 2011）、中国人やブラジル人のような大規模なエスニック・コミュニティは存在しない。フィリピン人学校は愛知県に1998年に開校した国際子ども学校（ELCC）があるのみ（岩本 2005；高畑 2014）である。インターナショナルスクールも設置されている地域は限られ、また経済的負担も大きいことから、大半の子どもたちは居住地の近隣の学校へ通っている。教会、特にカトリック教会は、フィリピンの言語や習慣や価値観の中で過ごすことができる唯一の場であるが、フィリピンにルーツを持つ子どもたちには、家庭でも学校でも地域社会でも、フィリピンの言語や習慣や価値観だけに基づいて生活することができる場はない。

4-3. 日本社会が持つ特性の柔軟な取り入れによる困難の解消

日本社会が持つ特性を柔軟に取り入れて暮らしているということが、彼らの困難を解消または緩和することにつながっていると考えられる。フィリピンでは植民地支配や交易を通して、中国・スペイン・アメリカなどの外来文化を独自の解釈で受け入れてきた歴史がある。外来文化を柔軟に受け入れることができる点はフィリピンにルーツを持つ子どもの特徴の1つと言える。

先行研究では、ブラジルにルーツを持つ子どもの中には、学校生活での反抗を示す子どもがいること（山ノ内 1999；森田 2007）や、予想された規範や価値とは矛盾するような仕方で適応を達成する子どもがいること（志水・清水 2001）が指摘されている。本稿の調査協力者の中にも、日本の言語や習慣や価値観に抵抗した人もいた。しかし彼らは抵抗するだけではなく、好ましいと考えたものは取り入れ、認めることが難しいと考えたものも受け入れていた。日本へ移動した調査協力者らは、学校で日本人の友人を作りたい、学習内容を理解したい、日本で進学や就職をしたいといった積極的な動機づけをして、苦勞しながらも日本語の運用能力を習得しており、日本社会から強制されるからというわけではなく、自発的に受け入れていていると考えられる。日本育ちの人も含め、教員や友人らの手助けを受けて困難を乗り越えた一方、経験や背景を活かし、自分自身で積極的に行動することで状況を好転させ、日本社会が持つ特性を柔軟に取り入れて暮らしている。

4-4. 日本社会におけるフィリピンに対するイメージが引き起こす困難への直面

伊藤・富永（2011）は「国籍・容姿・宗教・性別などの属性で人の価値が決められることに嫌悪感を抱いて」というある日系ブラジル人の高校生の事例を挙げ、このような「葛藤状況が個人的な経験ではない」ことを指摘している（伊藤・富永 2011：188）。フィリピンにルーツを持つ子どもたちが、フィリピン人であるとか、フィリピンにルーツを持つと見られる場合にも、同様の葛藤状況が生じている。

学校の友人や教員、地域社会で暮らす人びとが、韓国、中国、ブラジルなど他国の歴史や習慣や価

値観を深く理解しているとも限らないことには注意すべきである。しかし教科書やメディアを通して得られるフィリピンに対するイメージはごく限られている上に、否定的なものが多くを占めている。そのため彼らの葛藤の要因は外国人であると見られることだけではなく、人びとが持つフィリピンに対するイメージが否定的または極めて限定的であったり、イメージそのものを持ち合わせなかったりすることにもある。

5. おわりに

調査協力者の中には、インタビュー後に学校を卒業して進学・就職したり、進路を変更して中退したり退職したりした人もいる。フィリピンで進学した後、休学して日本へ移動し働いている人もおり、フィリピンから日本へ移動した人で再度フィリピンへ移動した人もいる。インタビュー後の経験を経た上で、困難だと感じるものがらや日本の教育に対する考えが変わっている可能性もあり、追跡調査により今後明らかにしていきたい。

〈謝辞〉

快く調査にご協力いただきました調査協力者の方々、研究会や論文執筆に際してご意見やご感想をくださった方々に心より感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- 池上重弘 (2001) 「ブラジル人増加の要因と増加の様相」池上重弘編『ブラジル人と国際化する地域社会——居住・教育・医療』明石書店, 18-37.
- 伊藤悦子・富永優花 (2011) 「日系ブラジル人高校生のアイデンティティと進路選択——『特色ある公立高校』とブラジル人学校の比較」『京都教育大学紀要』119: 179-194.
- 岩本和則 (2005) 「国際子ども学校の歩み——フィリピン人の子どもたちとともに」『解放教育』35(11): 31-37.
- 梅澤収・土屋マリルウ (2003) 「日本における外国人の子どもの学校経験——在日フィリピン人を例として」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』53: 247-256.
- 太田晴雄 (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 小内透 (2009) 「日本における外国人の教育問題の歴史と課題」小内透編『在日ブラジル人の教育と保育の変容』御茶の水書房, 171-191.
- 厚生労働省 (2016) 「人口動態調査(平成27年)」政府統計の総合窓口ホームページ (2016年10月5日取得, <https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do?method=extendTclass&refTarget=toukeihyo&listFormat=hierarchy&statCode=00450011&tstatCode=000001028897&tclass1=000001053058&tclass2=000001053061&tclass3=&tclass4=&tclass5=>).
- 児島明 (2006) 『ニューカマーの子どもと学校文化——日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- 佐久間孝正 (2005) 「多文化に開かれた教育に向けて」宮島喬・太田晴雄編『外国人の子どもと日本の教育——不就学問題と多文化共生の課題』東京大学出版会, 217-238.
- 佐藤郡衛 (2001) 「海外・帰国子女教育——新しい理念の構築に向けて」天野正治・村田翼夫編『多文化共生社会の教育』玉川大学出版部, 105-118.
- (2010) 『異文化間教育——文化間移動と子どもの教育』明石書店.
- 志水宏吉・清水陸美編 (2001) 『ニューカマーと教育——学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
- 清水陸美 (2006) 『ニューカマーの子どもたち——学校と家族の間の日常世界』勁草書房.
- 高畑幸 (2010) 「地域社会にみる多文化共生——名古屋市中区のフィリピン・コミュニティの試み」加藤剛編『もっと知ろう!! わたしたちの隣人——ニューカマー外国人と日本社会』世界思想社, 146-172.

- (2011) 「在日フィリピン人の一・五世代——教育と労働が隣り合わせの若者たち」『解放教育』明治図書出版, 41(10): 54-63.
- (2014) 「日本で唯一のフィリピン人学校——その役割の変遷を中心に」『ことばと社会』編集委員会編『ことばと社会』16: 247-254.
- 高畑幸・原めぐみ (2014) 「在日フィリピン人の1.5世代——日本は定住地か、それとも通過点か」『国際関係・比較文化研究』13(1): 21-39.
- 恒吉僚子 (1996) 「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久・奥平康熙・田中孝彦他編『学校文化という磁場』柏書房, 215-240.
- 角替弘規 (2013) 「フィリピン系ニューカマー家族の教育戦略——母国親族の教育意識と日本における教育戦略」『桐蔭論叢』28: 127-135.
- 角替弘規・家上幸子・清水睦美 (2011) 「フィリピン系ニューカマーの教育意識に関する一考察——大和市の国際結婚家庭の事例を中心に」『桐蔭論叢』24: 89-97.
- 徳永智子 (2008) 「『フィリピン系ニューカマー』生徒の進路意識と将来展望——『重要な他者』と『来日経緯』に着目して」『異文化間教育』28: 87-99.
- 永田貴聖 (2011) 『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版.
- 額賀美紗子 (2012) 「トランスナショナルな家族の再編と教育意識——フィリピン系ニューカマーを事例に」『和光大学現代人間学部紀要』5: 7-22.
- (2014) 「フィリピン系ニューカマー生徒の学業達成に関する一考察——トランスナショナルな家族ケアの影響に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』7: 77-97.
- (2016) 「フィリピン系ニューカマー第二世代の親子関係と地位達成に関する一考察——エスニシティとジェンダーの交錯に注目して」『和光大学現代人間学部紀要』9: 85-103.
- 三浦綾希子 (2013) 「フィリピン系ニューカマーのネットワーク形成と社会資源——家事労働者の母親に注目して」『異文化間教育』37: 116-126.
- 宮島喬 (2012) 「外国人の<教育を受ける権利>と就学義務——その適用をめぐる諸問題」宮島喬・吉村真子編『移民・マイノリティと変容する世界』法政大学出版局, 47-69.
- 森田京子 (2007) 『子どもたちのアイデンティティ・ポリティックス——ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィ』新曜社.
- 文部科学省 (2016) 「学校基本調査」政府統計の総合窓口ホームページ (2016年10月5日取得, https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL08020101.do?_toGL08020101_&tstatCode=000001011528&requestSender=dsearch).
- (2017) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」政府統計の総合窓口ホームページ (2017年6月13日取得, <https://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/GL02020101.do?method=extendTclass&refTarget=toukeihyo&listFormat=hierarchy&tstatCode=00400305&tstatCode=000001016761&tclass1=000001102915&tclass2=&tclass3=&tclass4=&tclass5=>).
- 山ノ内裕子 (1999) 「在日日系ブラジル人ティーンエイジャーの『抵抗』——文化人類学と批判的教育学の視点から」『異文化間教育』13: 89-103.
- 湯川笑子 (2006) 「年少者教育における母語保持・伸長を考える」『日本語教育』128: 13-23.
- Jabar, Melvin A. (2010) “Filipino Mothers’ Involvement in Children’s Education: Experiences and Challenges,” B. Jones & R. Silver eds., *Teachers Helping Teachers 2010 Proceedings*, 25-32, (Retrieved May 5, 2015, https://www.researchgate.net/publication/267427456_Filipino_Mothers'_Involvement_in_Children's_Education_Experiences_and_Challenges).
- (2011) “Educational Challenges of a Japanese-Filipino Child in a Japanese Classroom,” *The Asia-Pacific Education Researcher*, 20(2): 364-372, (Retrieved May 5, 2015, https://www.researchgate.net/publication/266530753_Educational_Challenges_of_a_Japanese-Filipino_Child_in_a_Japanese_Classroom).